

水 稲	
令和 元年 6月 営農技術情報	上川総合振興局 上川農業改良普及センター TEL : 84-2017 FAX : 84-2009

1 生育状況

移植時期は概ね天候に恵まれ順調に経過し、平年と比べ1日早く活着し、分けつ始も1日早くなりました。一部の地域で5月下旬に強風の日があり、移植時の強風により、植え傷みが散見されました。ななつぼしでは、6月15日現在の生育は平年並となりました。

表1 品種別生育状況（作況ほ6月15日現在） ※普及センター作況ほ7カ所平均

	品種	年次	草丈(cm)	葉数(葉)	茎数(m ²)	遅速日数
6月15日	ななつぼし	R元年	33.7	7.4	300	±0
		平年	31.6	7.4	287	
		差	2.1	0.0	13	
	ゆめぴりか	R元年	34.9	8.2	402	
		平年	32.9	7.7	341	
		差	2.0	0.5	61	

2 夏の気象予報

表2 6月中旬から7月上旬までの天候見通し

※札幌管区气象台6月13日発表

北海道地方	6月中旬			6月下旬			7月上旬		
	低い	並	高い	低い	並	高い	低い	並	高い
気温の出現確率(%)	40	40	20	40	40	20	30	30	40
天候	低気圧や湿った気流の影響や曇りの日が多く、期間の前半は雨の降る日があるでしょう。			高気圧と低気圧が交互に通りますが、高気圧に覆われやすい見込みです。天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。			高気圧と低気圧が交互に通る見込みです。平年と同様に天気は数日の周期で変わるでしょう。		

3 幼穂形成期の確認

～幼穂形成期は水管理の判断基準になります～

ほ場の平均的な生育株から主茎を抜き取り、その根元からカミソリ等で縦切りにします。3～5株で実施し、幼穂長が平均で2mmに達した時を幼穂形成期とします。

表3 品種別幼穂形成期および出穂期（平年値）

品種	幼穂形成期	出穂期
ななつぼし	6月27日	7月24日
ゆめぴりか	6月26日	7月25日

幼穂期の確認は水田毎、品種毎に行っておくと安心です！

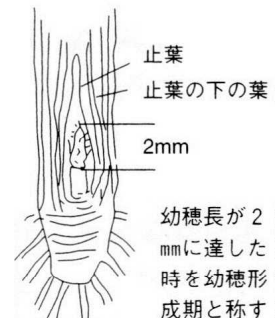


図1 幼穂形成期の確認

4 幼穂形成期前の水管理（分げつを促進させる水管理）

- (1) 幼穂形成期までは浅水管理とし、分げつを促進しましょう。
- (2) ワキの発生が著しい場合は中干しを行いましょう。その際には溝切りを併用し短期間で効果的に干しましょう。

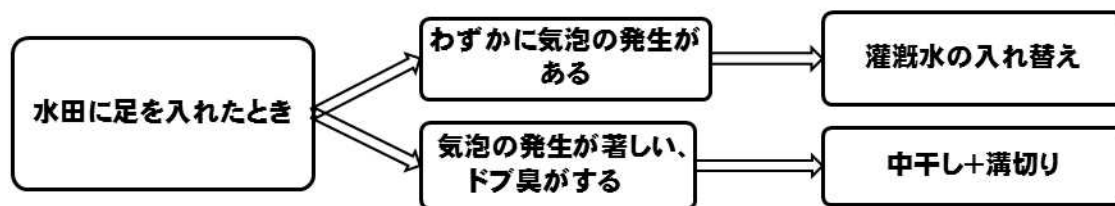


図2 ワキの発生程度に応じた対処法

5 幼穂形成期以降の水管理

～水稻の生育にあわせた深水管理で不稔を最小限に抑えましょう～

- (1) 幼穂形成期には、中干しを終了し、以降は徐々に深水管理としましょう。
- (2) 幼穂形成期から約 10 日間の前歴期間は、耐冷素質を強くします。前歴期間の水深は徐々に水位を高め、最大水深 10cm とします。ただし、茎数が少ない場合は幼穂形成期後 5 日間の水深を 5cm 程度に維持し、分げつを促進しましょう。
- (3) 前歴期間後 7～10 日間の冷害危険期は、低温による花粉の減少（不稔）を防ぐため、幼穂の発育にあわせて水位を高め、最大水深 18～20cm 程度を確保しましょう。冷害危険期の目安は、葉耳間長 ± 5cm の頃になります。

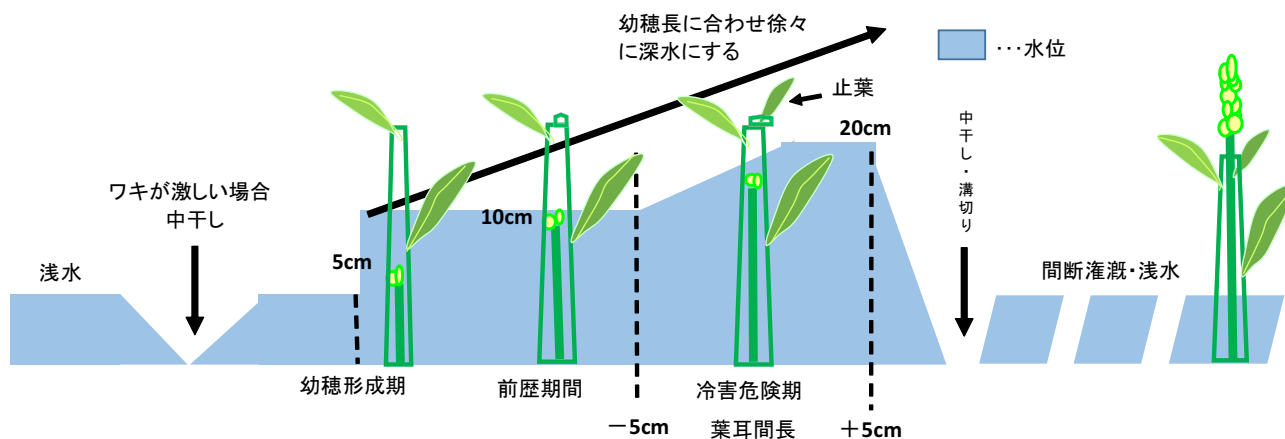


図3 幼穂形成期以降の水管理の目安

6 ケイ酸追肥

水稻は「ケイ酸植物」と言われるほどケイ酸を大量に吸収します。幼穂形成期の一週間後にケイ酸質資材を20kg/10a施用すると、図4のような効果が期待できます。

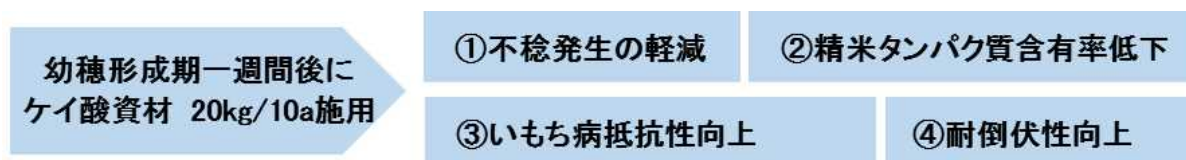


図4 ケイ酸資材追肥の効果

7 病虫害防除

(1) イネドロオイムシ

防除適期は、株当たりの平均卵塊数が2卵塊以上あり、幼虫の大半が孵化したときです。防除が早すぎると後発の幼虫に食害され、遅れた場合は幼虫が老齢化し防除効果が劣ります。

近年では複数の薬剤で抵抗性個体群の出現が疑われる事例が認められています。薬剤散布の際は規定以下の濃度で散布せず、希釈倍率を守り、薬剤抵抗性個体群の発生を助長しないように努めましょう。



写真1 イネドロオイムシ幼虫

(2) いもち病

いもち病は毎年各地域で発生しています。発生予察を行って、早期発見に努めましょう。病斑が1個でも見つければすぐに茎葉散布を開始します。基幹防除として出穂期、その7～10日後の基幹防除は必ず実施しましょう。

いもち病の発生しやすい水田

- ・近年いもち病が発生した水田
- ・風通しの悪い水田
- ・露が乾きにくい水田
- ・周囲の物陰で日照不足になる水田
- ・過繁茂な水田



写真2 いもち病

(3) アカヒゲホソミドリカスミカメ (カメムシ)

発生源は、水田周辺のイネ科雑草、麦畑、イネ科牧草地です。対策としては、畦畔の雑草を7月中旬までに刈取り、搬出するのが効果的です。出穂前の本田防除の必要は無く、いもち病と同時に基幹防除を2回行います。最も防除効果が高い時期は出穂期後7～10日後です。その後の追加防除はすくい取りによるカメムシの頭数によって決定します。

表4 追加防除の目安

ほしのゆめ →	1頭以上
きたくりん →	3頭以上
上記以外の品種 →	2頭以上
※散布予定日の2～3日前に水田20回振りすくい取りでのカメムシの数。	

すくい取りは風のない穏やかな日に行いましょう！



写真3 アカヒゲホソミドリカスミカメ

8 来年に向けた苗床の準備

- (1) 置床として長年使用してきた苗代ではリン酸過剰障害が散見されます。定期的に土壌診断を行い改善を図りましょう。
- (2) 新しい苗床や培養土は必ずpHを測定し、目標pH4.5を目安に酸度矯正を行ってください。

～農作業はゆとりをもって安全に行いましょう！～